巻頭言

雑　感

平川方久*

日本循環制御医学会が，その前身である研究会として創設されて20年を迎えようとしている．一分野，一方向からだけでなく，広い視野から循環を考えようとする本学会が果たした役割は非常に大きいものがある．いわゆる学際的な学会は，各分野の調整をうまく取る必要があり，軌道に乗るまでが大変である．20年を迎えようとしている本学会はうまく軌道に乗ったようには思えるが，最近の一般演題の応募状況を見ると麻酔関係からの応募で占められている感がある．創設時，そして現在までの経緯を見ると麻酔科関係が主体を占めるのはやむを得ないことかもしれないが，生理学，薬理学，循環器内科学，循環器外科学などのより多くの参加を期待したい．

幸いにも、学会誌である「循環制御」は、編集の目玉の一つでもある誌上シンポジウム、総説で学際的な面目を保っているが，原著論文の多くは麻酔科からのものである．もっとも，現在では研究者個人の立場は学際的であり，研究者が所属している部門にとらわれているわけではないから，このようなことに余りこだわる必要はないのかもしれない．研究手段は広く取り入れることが可能であるが，指導者の考え方はどうしても一方向に偏りがちである．言い換えれば，同じ現象を解釈するにしても，麻酔科に所属する研究者の研究は，麻酔科的見方になってしまう．学際的な学会，学術雑誌を通じて幅広いものの見方，考え方を身につけ，研究成果を大きく飛躍させることができるようになりたいと考えている．

最近の研究報告を見ていると，その内容は非常に専門的になってきている．個体レベルの研究から，臓器・細胞レベルへ，そして現在では分子レベルの研究が花盛りである．この傾向は基礎・臨床医学を問わず同じである．従来の基礎・臨床の枠は取り外され，お互いの領域を越えた研究，まさに学際的な研究が行われている．私はこのような傾向を否定するものではないが，得られた分子レベルの研究結果は，間接的にでも個体に対してどの様に敷衍できるのかを常に念頭に置いた研究を進めていただきたいと考えている．とくに臨床に所属しているものは，症例という貴重なデータを直接見ることができる立場にある．この立場を生かした研究のあり方を考えるべき時に来ているのではないかと思う．研究のための研究は厳に慎むべきことであり，マクロでの疑問をミクロで解明し，その結果をマクロに反映することこそ臨床を志す者の研究のあり方であろう．

ミクロの研究結果をマクロに還元するためには，研究を開始する時点での方向性の検討とともに，研究目的，方法，結果をあらゆる面から検討しなければならない．基礎，臨床の枠にとらわれず，同じレベルに立った真摯な討論により素晴らしい成果を生むための研究が成し遂げられるであろう．このような点からも，学際的な研究成果を討論する場，学会・学術雑誌の重要性がある．日本循環制御医学会が単に麻酔学研究者の中の循環に興味を持つものだけの集まりにならないように切に願うものである．

*岡山大学医学部麻酔・蘇生学講座

Presented by Medical*Online